

# e-dream-s 通信

No.44 発行：2004年4月11日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

## 目次

1. もしまし e-dream-s の辻ですが 辻荘一 p.2
2. Discover Sakhalin : あるいは、オホーツクの夏景色 井川好二 p.4
3. 横浜に行ってきました 中川房代 p.11
4. ベトナム・アジアツアーについての提案 山田昌子 p.13
5. お知らせ p.14



秋月の春祭り (2003.4 塚本美紀)

福岡県甘木市の山間にある小さな城下町秋月は、桜の名所で多くの観光客が訪れる。広場にはステージが設けられ、地元の人たちが踊りを披露している。

## もしもし e-dream-s の辻ですが

辻荘一

@aglance はご存知の通り海外写真サイトとオンデマンド日本写真サイトからなる、質はもちろん掲載枚数もおそらく世界一を誇る教育用写真サイトです。またオンデマンド日本写真サイトは、海外の日本語教師や生徒からのリクエストを受けてその写真を1週間以内に掲載するという、世界で初めての試みです。

開設以来、様々な方法でPRをして来た成果があり、@aglance は新聞や雑誌等に何度も取りあげられました。特に海外写真の方は写真の収集も順調で日本各地の教育委員会や教育関係サイトからリンクされています。

ただ、オンデマンドサイトの方はターゲットが海外の日本語教育関係者だということもあり、国内のメディアに取り上げられても、その効果は極めて限定的で、リクエストも月に1回あればいい方でした。しかし、このところ香港やオーストラリアなどからリクエストが連続しており、オンデマンドサイトが徐々に浸透しつつある感触を得ています。

@aglance はまた、世界中のカメラマンと教室を結びつけようとするプロジェクトでもあります。サイト上でもボランティアカメラマンを募集しており、実際5～6名登録されていますが、実質的には活動していない状態が続いていました。リクエストがあった時にはメールで撮影や提供をお願いしてきましたが、リクエスト自体が散発的なこともあり、あまり反応がありませんでした。結局最近ではボランティアカメラマンに撮影依頼はせず、結果掲載画像の大部分は e-dream-s 会員が撮影するか、会員が知人に頼んで提供してもらったものになっていました。

今回リクエストが連続し、会員だけではとてもまかないきれないほどの画像数を掲載しなければならなくなり、思い切って最近登録されたボランティアカメラマン4人に電話をしてみました。すると全員がこころよく引き受けてくださり、手持ちの画像や撮影してきた画像を数十枚受け取ったのです。また先日来日したオーストラリアの日本語教師の皆さんにとつたアンケートの画像もお願いしたところ、これも続々送られて来ています。

また、ボランティアカメラマンの皆さんは、もちろん写真に自信があるから登録しているはずですから、当たり前と言えば当たり前なのですが、提供していただいた写真のレベルがすべて非常に高いことにも驚かされました。

e-dream-s の柱の一つに「ネットワーク」という言葉があります。ネットワークとは e-dream-s が他の団体や個人とのコラボレート（協働）する中で新しいことを生み出そうというものです。ただ、いくら e-dream-s が高邁な理想をもち情熱を持って運営されていても、ネットワークを構築するのは決して易しいことではありません。

オンデマンドサイトへのリクエストの増加やボランティアカメラマンとのやりとりを見て二つのことが言えるでしょう。一つは続けることの大切さです。初めての試みというものはなかなか認知されないのですが、それに負けることなく努力を続けていけば、信用もされますし、認知も高まります。もう一

つは、世界とのネットワークを構築するには、e-mail は不可欠ですが、実際に話したり、会ったりすることも非常に大切だということです。それはメールのやり取りだけをしていたボランティアカメラマンに電話をすることによって、ネットワークが活性化したことを見ても、ECAP (Educators' Collaboration of Asia Pacific) 2003 の日韓文化相互理解教材開発が私たちが実際に韓国を訪れて韓国の先生がたと話をするによって初めて可能になったということを見ても明らかです。

e-dream-s を中心とする、ネットワークが構築されつつある感触があります。ただ、それをより広くより強固なものにするには、活動の継続と、e-mail, 電話, face to face など様々なレベルでのコミュニケーションが必要なのでしょう。

# Discover Sakhalin :

## あるいは、オホーツクの夏景色

井川 好二

英語教師の自主研修団体「ACROSS」が、創立30周年を迎える今年、その前身である「発音研究会」の創設者、中津燎子<sup>1</sup>先生が、幼い日を過ごされたロシアの地を訪れるのは、大変意味のあることだと考えられる。

そのウラジオストック<sup>2</sup>での日々を、ロシア語と日本語と中国語が錯綜する毎日で、次は何語が耳に飛び込んでくるのか楽しみであったと回顧される中津先生の記憶が、著書や講演を通して、ACROSSのコアメンバー自身の記憶として共有されていることを考え合わせれば、30年と云う区切りの年に、初めてロシアを訪れる意味は深い。

つまり、中津先生のみならず、ACROSSにとっても、まだ見ぬロシアが、発音訓練、異文化理解の基礎をなしているのである。

ちなみに、「ウラジオストック」は、ロシア語の『東方(オストック)を支配せよ(ウラジ)』からきていて、日本名は「浦塩」。しかし、今回のロシア訪問は、この浦塩ではなくその対岸の島、かつては「樺太<sup>3</sup>」と呼ばれたサハリンを「発見」しようとするのである。

今年が、日露戦争から100年と云うのも、日露関係を考える上で一つのポイントであって、対露恐怖

---

<sup>1</sup> 1925年福岡市に出生。3才で、日本領事館で通訳として勤務する父に連れられて旧ソ連領のウラジオストック市に渡る。1936年、日本に帰国。戦後、1956年渡米。結婚し2児を連れて1965年帰国。以降、英語塾を開き、東京・大阪・九州で異文化対応と発音訓練を教えて現在に至る。<http://www.roots-int.com/S-T/24/nakatsu.html> より。

<sup>2</sup> ウラジオストック：ロシア沿海州の都市。東方(オストック)を支配せよ(ウラジ)の意が示すように、極東進出をめざす帝政ロシアが1860年代に軍港を設置、のちシベリア鉄道の起点として発展。日本でも古くから浦塩の名で親しまれ、76年政府が貿易事務館を置き、81年には長崎との間に定期航路を開設、多数の出稼者が渡航した。1910年には約3000人の日本人居留民がいたが、女性は大半が娼婦であった。18年のシベリア出兵では、日本軍総司令部が置かれた。22年撤兵とともに日本人居留民の大部分は引揚げた。ソ連解体後の92年に対外開放。[岩波日本史辞典]

<sup>3</sup> からふと〔樺太〕北海道の北方にある南北に細長い島。面積7.6万km<sup>2</sup>。北緯50°以北はロシア領。以南の南樺太は1905年に日本領となったが、第二次世界大戦末期にソ連軍が占領。現在は千島(ちしま)列島とともに、ロシアのサハリン(Sakhalin)州を構成。中心都市ユジノサハリンスク(豊原(とよはら))。石炭・石油・天然ガス採掘と漁業・水産加工業・林業が主。オハ油田は大陸とパイプラインで結ばれる。ロシア語名サハリン。【新世紀ビジュアル】

に色づけされた過去が終焉し、今新たな歴史が始まりつつある。その日露の新たな一步は、サハリンからなのである。

サハリン沖に眠る石油・天然ガスが、その新日露関係の基礎なのである。むろん、冷戦の終結、アメリカの絶対化と他のスーパーパワーの相対化、中国の急成長などの国際情勢も、大きく影響を及ぼしていることは事実だが、大消費国「日本」の至近距離に眠るサハリンの石油・天然ガスの具体的な存在が、圧倒的事実として、日露の歴史を変えていく。

そのエネルギー開発の現場は、しかし、サケやカニなどの日本向けの水産資源の宝庫でもある。そして、こうしたエネルギー開発に付き物の、環境問題も発生している。

石油や天然ガス開発の巨大プロジェクトに加えて、それらを運ぶパイプライン建設も始まって、サハリンは今、「ゴールド・ラッシュ」状態であると云う。また、そうした巨大プロジェクトを支える人材は、外国語ができることが必須で、英語や日本語教育が大繁盛であると云う。

こうした現代のサハリンの社会と自然を、「発見」するのが今回のアジアツアーの第一の目的である。そこには、日本やアメリカの姿が、色濃く投影されているはず。

第二の目的は、古い枠組みの中でのサハリンを「再発見」すること。その「古い枠組み」とは、つまり、「旧ソ連」であったり、「旧樺太」であったり、「旧露西亜」であったりする。今もユジノサハリンスクに多く住むという朝鮮系ロシア人の存在は、その具体的な形の一つであり、抽象的には、日本の「対露恐怖」として存在した。このロシア・サハリン・アジアツアーに、北海道の函館を含めているのは、そのためである。

百聞は一見に如かずと云うが、長らく気にかかっていたロシアを訪れて、新たな発見をするのは、今のタイミングがベストであろう。変わりつつあるロシアと、変わらなければならない日本が見えるはずである。オホーツクの短い夏もまたいいものに違いない。(Sunday, April 11, 2004)

記

## ACROSS アジアツアー2004 「DISCOVER サハリン」

実施要項(案)

井川 好二

- A. 名称： ACROSS アジアツアー2004 DISCOVER サハリン
- B. 主催： ACROSS
- C. 企画： NPO 法人 e-dream-s

D. 期 間： 2004 年 8 月上旬（ 6 泊 7 日）

E. 参加費用： 約 25 万円

F. 参加者： ACROSS 会員、またはそれに準じると ACROSS が判断する個人、約 15 名。

G. 訪問予定地： 北海道函館市、ロシア・サハリン（ユジノサハリンスク<sup>4</sup>、オハ<sup>5</sup>）

H. プログラム：

1. サハリン石油・天然ガス開発プロジェクト見学
2. 外国語（日本語・英語）教員・学生との交流会
3. 現代ロシア・サハリン社会・文化を「発見」するフィールドワーク（ホームビジットなど）
4. 旧樺太を「発見」するフィールドワーク

I. 研修の要点（別紙参照）

1. サハリン石油・天然ガス開発プロジェクト：水産資源・エネルギー開発・環境問題
2. サハリン・日本天然ガス・パイプライン・プロジェクト(1999～)
3. 日本語を話す朝鮮系ロシア人：在留朝鮮人（4万人）
4. 旧日本領「樺太」：樺太・千島交換条約（1875）
5. ロシアと日本：日露戦争から100年（1904～05）
6. ポスト冷戦体制と北方領土問題(1945, 1988～)
7. 「日本から最も近い外国」サハリンでの日本語教育（1992～）
8. 英語教育：ブリティッシュ・カウンシル The British Council: Yuzhno-Sakhalinsk

---

<sup>4</sup> ユジノサハリンスク（Yuzhno-Sakhalinsk）南樺太（みなみからふと）南部、鈴谷川（すずやがわ、ススナイスキー川）沿岸にある豊原（とよはら）のロシア語名。人口16万。ロシアのサハリン州の州都で、機械・車両・食品などの工場が立地。日本統治時代の樺太庁博物館（現、ユジノサハリンスク郷土資料館）がある。

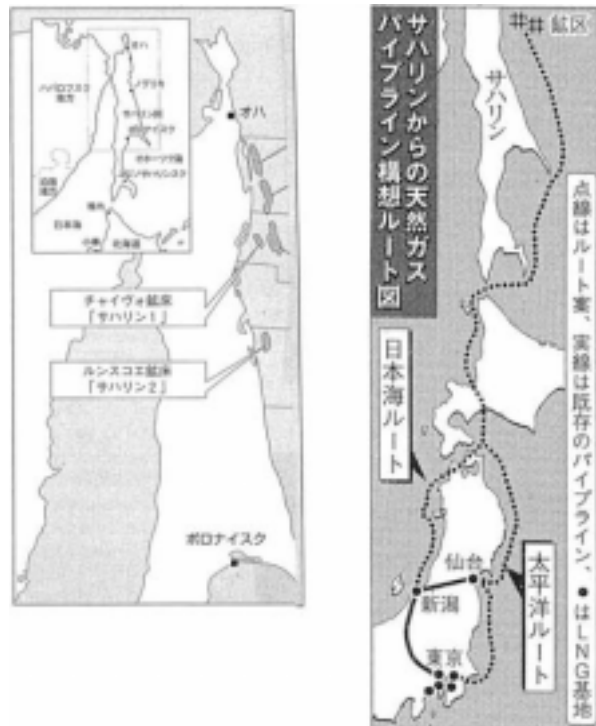
<sup>5</sup> オハ（Okha）ロシア、樺太（からふと）北部、オホーツク海に臨む都市。オハ油田の中心地で、間宮（まみや）海峡を越えてプリモルスキー（沿海州）地方までパイプラインがのびる。【新世紀ビジュアル】

## ロシア・サハリンでの研修の要点

### 1. サハリン石油・天然ガス開発プロジェクト：水産資源とエネルギー開発

- サケ・マス類、スケソウダラ、ズワイガニ、タラバガニ、ケガニ、ポタンエビ、ウニ、ツブガイ 日本の食卓を彩るこうした海の幸をはぐくむオホーツク海で、海洋汚染のリスクをはらむ油田開発がはじまろうとしている。(98年10月26日毎日新聞・記事より)
- ロシア・サハリン島ではサハリン I~IX の石油・天然ガス開発が計画中または進行中です。特にサハリン島北東部で行われているサハリン I とサハリン II は、既に開発が始まっており、油流出による漁業や生態系への影響、絶滅危惧種であるオオワシやコククジラやへの影響、石油・ガスパイプラインによる環境影響など様々な懸念が日本国内外から挙げられています。  
<http://www.foejapan.org/aid/jbic02/sakhalin/> より

### 2. サハリン/日本天然ガス・パイプライン・プロジェクト



<http://www.ijjnet.or.jp/IHCC/prj-sahalin-gas-kaihatu01-pro1-route01.html> より

- パイプラインをサハリンから需要地の関東まで敷設しようというもの。構想では、天然ガスをサハリン北部(太平洋側)からまずパイプラインでサハリン南端部に運び、さらに海底パイプラインで北海道を経由して日本海側の新潟まで運ぶ日本海ルートと三陸沖を南下する太平洋ルートがある。総延長は海峡部を含めてざっと1500キロメートルとなる。総工費は2500億円とも5000億円ともいわれている。実現すれば、日本にとっても、アジアにとっても第1号の国際パイプラインとなる。
- 1999年4月末、石油資源開発会社、伊藤忠商事、丸紅の3社によって、「日本サハリンパイプライン調査会社」が発足、エクソンの子会社「エクソン・ジャパン・パイプライン」社との間で、事業化のための調査に関する協定が結ばれ、2002年8月に調査が完了した。
- 輸送される天然ガスは、LNG換算600万トンとなるが、問題はそれだけの需要が確定できるか



どうかである。石油業界も、競合品としてのパイプライン・ガスの市場浸透には警戒的である。LPG業界も然りである。都市ガス業界といえども大手と中小では必ずしも利害が一致しているわけではない。

- 今後は公的資金の導入の可能性についても、総資金が1兆円を超えるといわれるだけに検討が行われよう。確かに国家プロジェクト級の事業であるが、エネルギー安全保障コストも含めて考える必要があり、規制緩和の動きとどう関連づけするかがひとつのポイントになろう。[現代用語の基礎知識 2003]

### 3. 日本語を話す朝鮮系ロシア人

#### 在留朝鮮人

- サハリンには日本語を話す朝鮮系の人達がたくさんいる。青空市場で野菜や漬物、花などを売っているおばさんたちが日本語で話しかけてくる。初めてサハリンに行った人は多分びっくりするだろう。何故ここに日本語を話す人がいるのだろうか？
- 日本の朝鮮支配時代、強制に近い形で徴用された大勢の労働者が、北海道や樺太（サハリン）にやってきた。当時の樺太は日本の領土であった。敗戦に伴い樺太はソ連領になり、日本人は本土へ引き上げ、朝鮮系の人たちは残された形になった。朝鮮はその後悲劇が続き、朝鮮戦争で南北に分断され北朝鮮、韓国に別れた。無国籍のまま、大勢の朝鮮人達が、故郷に帰ることが出来なくなってしまった。
- サハリンの人口70万人近いなか、朝鮮系の人達は約4万人といわれる。（65%が韓国系）。大陸の各地から移住したり、北朝鮮から自ら望んできた人達もいる。3世までの彼らは勤労意欲が高く、自由経済のなかで経済力を増して、一般のロシア人よりも生活水準が高いと言われる。日本語を話すことで、貿易や観光の通訳に引っ張りだこだ。祖国に望郷の念を抱きながらようやく、韓国へ永住帰国した人は約300人。
- 今なお1000人以上が帰国を希望しているという。サハリンを訪れる日本人は、歴史の悲劇が生んだ複雑さに接し、こうした事を2度と起したくないと胸に誓うはずだ。

<http://www.h5.dion.ne.jp/~sanesu/saharin/korea.html> より

### 4. 旧日本領：樺太

#### 樺太・千島交換条約【からふとちしまこうかんじょうやく】

1875年5月成立の日本とロシアの国境画定条約。55年の日露和親条約では、千島のエトロフ(択捉)水道を境界としたが、樺太は日露両国の雑居地とされた。幕末から明治初期にかけて、ロシアは樺太の日本側拠点に圧力をかけ、その維持は困難となった。樺太放棄論に傾いた明治政府は、74年榎本武揚を特命全権公使としてロシアに派遣、75年5月日本が樺太を放棄する代わりに千島の領有権を得ることを骨子とする8か条の条約が結ばれた。なお、樺太のアイヌは3年後に日露いずれかの国籍を選ぶことになっていたが、同年10月、日本は樺太アイヌ841人を北海道に強制移住させた。[岩波日本史辞典]

### 5. ロシアと日本：日露戦争から100年

#### にちろ せんそう【日露戦争】

1904~05年(明治37~38)日本と帝政ロシアとが満州・朝鮮の制覇を争った戦争。04年2月国交断



絶以来、同年 8 月以降の旅順攻囲、05 年 3 月の奉天大会戦、同年 5 月の日本海海戦などでの日本の勝利を経て同年 9 月アメリカ大統領 T.ルーズヴェルトの斡旋によりポーツマスにおいて講和条約成立。[広辞苑第五版図版付き]

## 6. ポスト冷戦体制と北方領土問題

### 北方領土

最も一般的にこの語が用いられているのは、国後、択捉という南千島についてである。国会の北方領土返還決議では、歯舞、色丹をも含めた四島をさす。これら四島は、第 2 次世界大戦の際にソ連（当時）に軍事占領された状態がそのまま続いており、日本はこれらの返還を求めてきた。日本側の主張は、南千島が固有の領土であるとする歴史的事情の解明に主眼があり（1855（安政 2）年の日露和親条約、67（明治 3）年の樺太島仮規制、75（明治 8）年の千島・樺太交換条約）、千島列島のソ連への引渡しを決めた米英ソ 3 国首脳間のヤルタ協定には非当事国として拘束されないという。これに対してソ連は、領土問題は国際協定その他によりすでに解決済みとの態度をとり、返還交渉の余地はほとんどなかった。しかし、日口関係のもとでは異なった扱いがなされており、返還が大きな糧となっている。[現代用語の基礎知識 2003]

## 7. 「日本から最も近い外国」サハリンの日本語教育

- 州都ユジノサハリンスク市には水産会社、石油開発に携わる大手商社など数多くの日本企業が存在する。また総領事館などの公的機関もある。ロシアでこれほど日本と深く結びついている地はほかにないであろう。
- 当然、当地の日本語学習熱は高い。学生達は国際交流、経済交流の場で通訳・翻訳者として活躍する姿を夢見、日々勉強に励んでいる。日系ロシア人、韓国・朝鮮系ロシア人の学生について言えば、近親者が日本人、または日本語話者という場合がある（\*）。身近な所に日本語環境があったため、幼い頃から純粋な興味を持ち、日本語学習を始めた、あるいは近親者から勧められたという者が多い。これらのケースは他の都市と比べ、特徴的である
- **サハリン国立総合大学付属経済・東洋学大学**：サハリン国立総合大学はサハリン州（千島列島を含む）において唯一の国立高等教育機関であり、経済・東洋学大学は当地日本語教育の中心的役割を担っている。卒業生はサハリン内外の教育界、経済界で活躍中である。日本人教師の派遣が始まったのは 1992 年。日本語学科講師陣はすべて本学卒業生である。一昨年度、サハリン日本語教師会が発足し、本学が中心となって運営している。

[http://www.jpf.go.jp/j/learn\\_j/voice\\_j/touou/russia/2003/report06.html](http://www.jpf.go.jp/j/learn_j/voice_j/touou/russia/2003/report06.html) より

## 8. 英語教育：ブリティッシュ・カウンシル The British Council: Yuzhno-Sakhalinsk

### ELT Programmes

- Up to 1991 the Sakhalin Region was a "closed" territory deprived of access and integration into world economy, politics and international relations. But since 1991 Sakhalin has been heavily involved into international contacts connected with the oil and gas exploration in the North of the Island. Exposing the region to international contacts has provoked an upsurge for wide spread use of English as a language of communication in key-areas of economy, especially in oil and gas business, in financial and computer

services, in education and training, in foreign travel and politics.

- This sets new requirements to the teachers. Under existing circumstances teachers must be able to resolve problems arising in the process of reform of educational system: they are supposed to possess strong leadership skills, be curriculum developers equipped with the modern methodological tools. The teachers' needs require creating new ways of up-dating their qualifications. Hence the demand for regular and up to date refresher<sup>6</sup> courses.
- The Russian-British Education and Information Centre Project Team holds Courses of Continuous Professional Development for English Language teachers. The Programme - SakhInSETT - is aimed at introducing a new model of in-service training based on reflective and project approaches for EL teachers in Sakhalin. A special emphasis is put on the development of strategic thinking of the teacher, on his/her projective activity, on providing him or her with special training how to handle experimental and innovative work.
- The participants are supposed to attend five workshops and produce their own projects on developing methods of teaching English. Those who succeed in implementation and presentation of the results of their own projects are awarded with the certificates that might be the ground for raising teacher's qualification category.
- The Project is recognized and approved by the Department of Education, Culture and Sport of the Sakhalin Oblast<sup>7</sup>, is run by the British Council and supported by BP<sup>8</sup>.
- We recognize the significance of education and its importance for people. As BP chief executive Sir John Brown said: "The spreading of knowledge is the true secret of progress".

**For further information please contact:**

Vlada Lapshina, SakhInSETT Project Co-ordinator

Telephone: +7(4242) 72 20 45

E-Mail: [vlapshina@rambler.ru](mailto:vlapshina@rambler.ru)

<http://www.britishcouncil.ru/regions/sakhalin/elt.htm> より

井川 好二

Sunday, April 11, 2004

---

<sup>6</sup> 再教育;[リーダーズ + プラスV 2]

<sup>7</sup> 【ロシア・ソ連】 州.[Russ][リーダーズ + プラスV 2]

<sup>8</sup> BP: British Petroleum ブリティッシュ・ペトロリアム(社); [リーダーズ + プラスV 2]

# 横浜に行ってきました

中川 房代

3月19日(金)～21日(日) 横浜で開催された「日本 NPO 学会第 6 回年次大会」に参加した。2日間だけの参加だったが、その報告を書きたいと思う。



最初に、「日本 NPO 学会」とは何かを知って頂く意味で、その特徴を私なりに 2 つあげてみる。

## 1. 世界最大の NPO 研究ネットワーク

1999 年 3 月に発足した「日本 NPO 学会 ; JANPORA<sup>9</sup>(Japan NPO Research Association)」は、現在、会員約 1,300 名。30 年の歴史を持つアメリカの NPO 学会 ARNOVA<sup>10</sup>(Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action)は、会員約 1,000 名、1992 年に設立された ISTR<sup>11</sup>(International Society for Third-Sector Research)は 84 カ国約 700 名、ということだから、日本 NPO 学会は、現在“世界最大の NPO 研究ネットワーク”である。

2 日目の午後に行われた公開国際シンポジウム「グローバル化と市民社会」

## 2. 実務者の多い学会

日本 NPO 学会の会員構成は、「大学教員」27%、「学生」19%、「NPO 勤務・経営」15%など(入会時のデータによる)で、大学教員と学生を合わせた「研究者」が 46%で、全体の半数に満たない<sup>12</sup>ということが、通常の学会と大きく異なる点である。

さて、私が参加した分科会は、「NPO と市民参加」「資金調達と財務」「日本の寄付とボランティア」の 3 つ。

分科会の発表者や興味深い発言をした人には、挨拶しに行き、名刺を交換してきた。その中で、「資金調達」の分科会で知り合った二人と一緒にランチを食べに行った。一人は、これまで NPO についての研究をしてきた大学院生で、4 月から石川県で今度新たに設立する NPO の事務局長をすることになった女性。これからも連絡を取り合いましょう、と言って別れ、いくつか資料も送った。今頃は、始まったばかりの NPO の仕事で忙しくしていることだろう。もう一人は、日本文化を勉強するために日本に留学したドイツ人の女性で、NPO に興味を持ち日本の NPO の歴史について調査をしているという。ドイツでは、NPO に資金提供をするための組織が次々とできているようで、彼女は将来そんな仕事もしてみたいと話していた。

<sup>9</sup> ホームページ <http://www.osipp.osaka-u.ac.jp/janpora/>

<sup>10</sup> ホームページ <http://www.arnova.org/>

<sup>11</sup> ホームページ <http://www.istr.org/>

<sup>12</sup> 山内直人編(2004)「NPO 白書 2004」大阪大学大学院国際公共政策研究科 NPO 研究情報センター。「第 16 章 NPO 研究」P.93 参照



学会の参加者と（懇親会で）

学会が何たるかを知らずに参加した私の素朴な感想は、分科会の発表者はほとんどが大学の教員 = 研究者で、この年次大会に参加しているのも研究者が多くを占めていたのが、残念だったことだ。学会は、勿論、研究や理論の発表の場なのだろうが、実際に NPO で働いている人の実践発表ももう少したくさんあり、その場で、研究者や専門家からのアドバイスがあれば、もっといいのになあと思った。それを求めるのであれば別の場に行くべきなのかもしれないが、実務者が多い学会ならではの交流がもっとあれば、NPO の発展にとって有益なのではないかと思う。

学会の内容とは直接関係ないが、今回の学会の開かれた会場「横浜開港記念会館<sup>13</sup>」は、なかなかよかった。大阪で言うと中之島公会堂のようなレンガ造りの建物で、外観も中のステンドグラスもステキだった。この会場を選んだ理由は、横浜市長からのお薦めがあり、また「格安だった」とのことらしいが、こういった歴史的建造物で開催する会もよいなあと思った。

最後に、ひとつだけとても心残りなのは、中華街に行きながら、美味しいチャイニーズをゆっくり味わえなかったことだ。今度機会があったら、日本最大の中華街を十分に堪能したい。

---

<sup>13</sup> 「ジャックの塔」と呼ばれる時計台が目を引いている。横浜開港 50 年記念として市民の寄付で建築され、1917 年に完成した。横浜の風景や黒船ポーハタン号を描いたステンドグラスが美しい。重要文化財。（「歩く地図 Nippon 5 横浜・鎌倉」山と溪谷社より）  
外観やステンドグラスの写真は、<http://daibouken.com/kyoto/kantomain/yokohamakindai3.htm> や <http://www.h3.dion.ne.jp/%7Eakuta/yokohama.htm> などを参照

## ベトナム・アジアツアーについての提案

ベトナム・アジアツアー実行委員会

(文責:山田昌子)

鳥インフルエンザが発生し、新聞の紙面やテレビのニュースを賑わしています。ベトナムでは、1月の段階で39名の感染者の疑いが報道されましたが、少しずつ落ち着く様子を見せており、政府は終息宣言をする方針を示していました。が、にもかかわらず、感染者から感染した人もおり、3月末には、とうとう死者が16名となりました。

ベトナム・アジアツアー実行委員会が発足し、これからという時ですが、今夏の実施は難しい事態となっています。そこで、大変残念ですが、実行委員会から「ベトナムへのアジアツアー中止」の提案をせざるをえません。

### <理由>

(1)鳥インフルエンザの発生。アジアツアーの目的のひとつとして、現地での「異文化体験」があり、鶏や豚が生きたまま売られている市場の状況を見たいと計画していたが、鳥インフルエンザの発生状況を考えると、この目的を達成するのは困難である。

(2)従来アジアツアーでは、現地の英語、又は日本語の先生方と交流を行ってきており、これもまたアジアツアーの目的のひとつであるが、2回の渡越とe-メール等での連絡を何度も試みたにもかかわらず、ホーチミンの市教育課から、先生方との交流についての内諾を得ておらず、また、共産主義国家であることから手続きにもっと時間がかかりそうでもあることから、現在はこの目的を達成するのは困難である。

### <今後の展望>

鳥インフルエンザがおさまった後、ホーチミンの市教育課と気長に連絡を取っていきたい。また、別のルートを利用して、大学レベルも視野にいれコンタクトパーソンを探し、近い将来、ベトナムへのアジアツアー、又はECAPの実現の方向性を探りたい。

---

## お知らせ

---

### < 提案 >

「ACROSSアジアツアー2004・ベトナム」の2004年の実施中止について

### < 提案者 >

e-dream-s代表理事 辻 荘一 副代表理事 中川 房代

ACROSS会長 河野 良子 副会長 藤澤 俊之

### < 提案内容 >

#### (1) 「ベトナムツアーの2004年実施の見送り（延期）」

「2004年の実施は見送り（延期）とし、近い将来実施ができるように検討していく」  
こととしたい。

その理由として、(A)鳥インフルエンザへの危惧、(B)現在、ツアーで先生方との交流  
をするのが難しい状況である（先生方と交流する体制にない）こと、があげられ  
る。

#### (2) 代替案の検討

「ベトナム」に替わる行き先を早急に検討し、「アジアツアー2004」は実施する方向  
で考えたい。（提案については後日）

### < 提案理由 >

1月のe-dream-s理事会で「ECAP・ベトナム」の中止を、また、ACROSSの全国会議で、  
「ACROSSアジアツアー2004」をベトナムで行うことを決定し、その後、ベトナムツアー  
実行委員会を発足させ、準備を進めてきました。

しかし、最近になり、鳥インフルエンザ問題の浮上、またツアーの中でベトナムの先  
生方との交流をするのが難しいことから、ツアーを2004年夏に実施するのが厳しい状  
況になってきました。この実行委員会の意向を受け、提案者4名より上の提案をし  
ません。



< 追加事項 >

今回のベトナムツアー中止の提案は大変残念なことなのですが、近い将来実施できるよう、引き続き検討していきたいと思っています。

< 提案 > について、皆さまからのご意見を頂戴したいと思っています。  
中川<nakagawa@e-dream-s.org>まで、よろしくお願ひします。

編集後記

4月になり、私の勤務する高校でもたくさんの新入生を迎えようとしている。中には、中学校を卒業して数十年が経過している人たちもいるが、鞆から筆箱を取り出す姿が初々しい。いくつになっても新しいことに挑戦する人の姿には心を打たれる。私も頑張らなければ、と心を新たにする春である。(塚本美紀)